

平成 21 年 6 月 8 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18520236  
 研究課題名（和文） 中世後期イギリスにおける宗教文学の写本と読者に関する研究  
 研究課題名（英文） Manuscripts and Readers of Religious Writings in Late Medieval England  
 研究代表者  
 松田 隆美（MATSUDA TAKAMI）  
 慶應義塾大学・文学部・教授  
 研究者番号：50190476

## 研究成果の概要：

本研究は、14 - 16 世紀に英語で書かれた宗教散文文学の一次資料である同時代の写本を研究対象とし、写本の編集方針やそこに残された読者の痕跡を調査し、未刊行資料については校訂テキストや書誌学的記述を整備することで、宗教散文が中世後期の読者によっていかに受容され、また受容を通じてテキストの性質が変容した様を具体的に明らかにした。さらにその結果を応用して、中世後期イギリス文学の諸作品を同時代の書物文化との関わりにおいて個別に分析して、作品のジャンルの特質を明らかにするとともに、文学史的に新たな位置づけをおこなった。

## 交付額

（金額単位：円）

|         | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2006 年度 | 1,300,000 | 0       | 1,300,000 |
| 2007 年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 2008 年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 年度      |           |         |           |
| 年度      |           |         |           |
| 総計      | 3,500,000 | 660,000 | 4,160,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 ・ 英米・英語圏文学

キーワード：西洋中世文学、書物史、イギリス文学、西洋中世写本、電子テキスト、古文書学

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の対象である 14 - 16 世紀に英語で書かれた宗教散文テキストには、説教、聖書や聖人伝のパラフレーズ、教訓逸話集を

はじめとする教訓的ナラティブ、キリスト教道徳の手引き書、ディヴォーショナルな目的を持った散文などが含まれる。現存する写本数の多さから判断する限り、こうした宗教散

文が中世後期の英文学の重要な一部分であることは明らかだが、未だに未刊行のテキストも多く、作者や成立事情に関しても不明な点が多い。ゆえに宗教散文の研究に際しては、それらが含まれている写本の特徴や読者層に注目して、写本間の違いに着目しつつ、テキストが「読書の文脈」によっていかなる解釈と機能を付与されて受容されていたかに焦点をあてることが有効である。

中世写本研究には長い伝統があるが、写本生産の技術的な側面に注目した書誌学研究が主流であった。また、中世文学研究において同一作品の複数の写本を比較検討することは基本であるが、その目的は、作者の意図をもっとも忠実に反映していると推察される「最良の」テキストを同定することにあつたため、個々のテキストを写本のコンテキストから切り離して相互比較することが多かった。

しかし近年では、作者の意図をさぐることよりもテキストが読者によっていかに受容されてきたかに注目し、個々のテキストを具体的な書物文化のなかに位置づける研究が生まれている。書物生産に実際に関わる写本の編纂者や写字生、印刷者は、以前は作者の意図を不完全ながらも具現化する存在と理解されてきたが、近年ではむしろ、彼らをテキストの最初の読者とみなして、後の読者に対しての指標となるような具体的な読書の痕跡を写本や初期印刷本の紙面に残しているのとらえ、それらを積極的にテキスト解釈や受容研究に反映させてゆこうとしている。宗教散文文学には未刊行のテキストがまだ相当存在しており、個々の写本や作品の基礎調査もいまだ不十分なため、そうした書物文化史的研究は一次資料の整備と並行して進められる必要があるのである。

## 2. 研究の目的

本研究が研究対象とする14 - 16世紀に英語で書かれた宗教散文テキストの初期の読者の痕跡は、写本の編纂方針、ページレイアウト、挿絵、欄外書き込みなどのかたちで、写本の上に残されている。本研究は、それらを積極的にテキスト解釈の資料として活用し、読者と写本編纂の視点からテキストを読み直すことで、テキストを、作者によって固定化された静的なものではなく、その伝播の過程や読者の受容形態によって常に変化する動的なものにとらえ、中世後期の宗教文学の特質を、その時代の書物文化史との関わりにおいて明らかにすることを目的とする。

また、本研究の対象である中世後期の宗教散文文学には、未刊行のテキストがまだ相当存在しており、個々の写本や作品の基礎調査もいまだ不十分である。そうした研究状況を考慮して、成果を論文のかたちで刊行するのみならず、写本の目録や未刊行テキストの校訂版を作成して、基礎データを整備することも重要である。本研究では、テキスト校訂において近年活用され始めているXML(eXtensible Mark up Language)文書のかたちで一次資料を系統的に蓄積することで、研究環境を整備することをあわせて目的とする。

そうして蓄積した写本に関する書誌記述や未刊行テキストの校訂版を活用して、書物文化史と文学史の視点から中世後期のイギリス文学について個別研究を推進する。まず、中世イギリスの宗教文学の全体像を、現存する写本の特質に注目して描き出す。その全体像を基盤として、同時代のナラティブ文学（ヴィジョン、ロマンス等）や宗教劇などの隣接するジャンルの作品を、宗教文学との関

連で新たに中世文学史の中に位置づけ直すことを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究は、(1)未だ先行研究が乏しい宗教散文文学の写本に関してチェックリストを作成し、その内容に関して詳しい記述を作成する基礎的な書誌資料作成、(2)それらの写本に含まれる未刊行の宗教散文テキストのトランスクリプションと校訂、そして、(3)そうして整備された資料を活用してなされる、中世イギリス文学作品を対象とした文学史・書物文化史的研究で構成され、写本研究と書物史の方法論、デジタル校訂法、文学史の方法論を統合的に用いておこなわれる。14 - 16 世紀に制作された英語の宗教文学写本のなかから、(1) 写字生による欄外書き込み（挿絵類を含む）が一貫してみられる写本、(2) 単一写本のなかに宗教的な散文テキストを中心に複数のテキストを含んだ、miscellany 写本の2種類を特に調査対象とする。こうした写本の具体的なコンテンツについては正確な記述が未だなされていないものが多いからである。写本を精査した結果、そのなかの英語の宗教散文テキストに関して「コンテキストの比較研究」を行う。それぞれの写本のコンテキスト - 直前、直後のテキストとの関連、写本編纂における編纂者の意図、挿絵とテキストの関係など - を写本間で比較検討し、同じテキストが異なった写本の文脈で、いかなるジャンルの期待をもって受容されているか、いかなる読者層を想定して作成されているかを明らかにする。未だに学術的校訂版が作成されていない未刊行散文テキストのなかから、特に、複数の英語及びラテン語テキストを典拠として書かれた「抜粋集」(compilatio)的な構造をもったテ

クストを対象として、XML によるデジタル校訂をおこなうとともに、テキストの典拠を調査する。こうして構築された書誌資料と一次文献を活用して、中世後期英文学の様々なテキストに対して書物文化史的視点から分析をおこない、未だ全体像が正確につかめていない宗教散文文学の特色を明らかにするとともに、中世文学におけるジャンル研究の方法論を参考にしつつ、個々の作品が、その写本のコンテキストによってジャンルのにも規定されうることを個別研究を通じて具体的に示す。

### 4. 研究成果

#### (1) 中世後期イギリスの宗教文学に関する写本および未刊行テキストの精査

主要な研究対象として、14 -15 世紀に制作された英語による宗教文学 miscellany 写本 4 点 - Oxford, Bodl. Libr. MS Rawlinson C. 894; Douce 322; London, BL MS Royal 17.C.18; Harley 1706 - を選出し、これらについてこれまでの予備調査をふまえて、その内容の詳細なチェックリストを作成した。特に、Bodl. Libr. MS Rawlinson C. 894 写本とそれと緊密な関係にある London, BL MS Royal 17.C.18 の2写本については、写本編纂者(compilator)の手になると思われるテキスト間のルブリカ、写字生あるいは同時代の読者による欄外書き込みなどを調査し記録すると共に、この2写本に共通して含まれる英語の宗教散文テキスト、擬ベルナルドゥス作 *Meditationes piissimae de cognitione humanae conditionis* の中英語テキストを、16 世紀の Wynkyn de Worde の刊本テキストとも比較しつつ転写し、デジタル校訂をした。また、同時期の2点の宗教文学アンソロジー写本 Oxford, Bodl. Libr. MS Douce 322;

London, BL MS Harley 1706 に関して、写本の欄外書き込み、ページレイアウト、挿絵、頭文字などのパラテキスト要素に注目して調査をおこなった。

さらに、英語によるヴィジョン文学を数点含んだ15世紀の宗教文学写本 London, B. L. MS Add. 34193 に関して写本に含まれるテキストのチェックリストを作成するとともに写本の編集方針をルブリカや作品の内容から分析した。

こうした写本のコンテンツと流通のコンテキストに関する詳細な基礎調査の結果をふまえて、以下のような応用研究をおこない、それぞれ成果として発表した。

## (2) 中世後期イギリス文学を対象とした、書物文化史的視点に基づいた応用研究

中世後期の宗教散文のうち特に多くの写本に見いだされる神秘主義的テキストに注目し、それらが15 - 16世紀において、俗信徒を対象とした「実践と観想の生活」(mixed life)の勧めとして活用されてゆく過程を、写本のコンテキストおよび聖人劇などの関連ジャンルのテキストとの比較を通じて明らかにした。中世後期の宗教的心性が写本や初期印刷本の編集方針に具体的に反映されていることを証明することで、書物史的方法論が文学史研究に具体的に寄与することを示した。

London, B. L. MS Add. 34193 をはじめ複数の写本に含まれる宗教ヴィジョン文学、*St Patrick's Purgatory* に関して、14 - 15世紀の現存する複数のヴァージョンを比較し、さらに本作品を14世紀のロマンス *Sir Gawain and the Green Knight* のサブテキストと位置づけることで、宗教的な死後世界探訪譚と騎士道ロマンスの間の接点を具体的に指摘し、ヴィジョン文学の中世後期におけ

るジャンルの広がりを明らかにした。この研究をさらに発展させて、London, B. L. MS Add. 34193 に含まれる複数の英語によるヴィジョン文学に関して、これらに共通する中世後期特有の異界意識を論じ、この写本を、中世末期に「新たな死後世界文学」として編纂されたアンソロジーとして捉える視点を指摘した。

中世後期イギリスの様々な宗教文学をその写本のコンテキストを精査し、またテキスト間の比較を明らかにすることで検討した結果、文学史的視点から中英語の宗教文学の全体像を記述することができた。中英語の宗教文学については、一部の神秘主義文学や *Ancrene Wisse* のような初期中英語の修道院文学については盛んに研究されているが、それ以外については、その現存する写本の多さにも関わらず系統的な研究が未だ不十分である。研究代表者は宗教文学をキリスト教教化文学、ヴィジョン文学、寓意文学、宗教抒情詩などのジャンルに分けて、その文学史的展開と写本について総括的にまとめた。研究代表者が共同執筆・編集した『中世イギリス文学入門』のなかにまとめられたこれらの論考は、中世イギリスの宗教文学に関する日本語による初めての総括的な記述である。

以上のような個別研究と並行して、本研究の方法論の意義と応用可能性について、以下のような視点を確立し発表した。

## (3) 書物文化史的方法論の意義と重要性

本研究における書物文化史的アプローチを中世イギリス文学研究史の視点から整理し、書物文化史がキリスト教教化文学のみならずチヨースーのような世俗文学の分析にも活用可能なことを、今後の研究の方向性に関する提言とともに論文にまとめた。また、本研究の基本である写本の文脈研究が、将来

の中世文学研究において、読者の視点を考える上で重要な方法論であることを学会において発表した。書物文化史を文学研究の一方法論として考えるとき、その理念的基盤は1980年代の受容理論に遡ると考えることが可能である。そのような視座に立って、中世イギリス文学の研究史を1980年代から現在まで具体的に検証し、そのなかで書物史と写本研究が果たしつつ役割を指摘し、この方法論が将来の学際的な西洋中世研究のためにも重要な可能性を持っていることを指摘した。

また、本研究で調査対象とした中世後期の写本及び15-16世紀の初期刊本のなかには、研究代表者の所属機関である慶應義塾図書館に収蔵されている資料もあったが、それらについては詳細な書誌記述と解説を展示会の図録のかたちで刊行する機会を得た。図書館の企画というかたちで、図録刊行と資料展示によって本研究にかかわる一次資料の一部を一般公開できたことは有意義であったと考える。

以上のように、本研究では、(1) 宗教文学写本の精査と未刊行テキストのデジタル校訂による一次資料の整備、(2) 中世イギリスの宗教文学および関連テキストを対象とした書物文化史・文学史的応用研究、(3) 本研究で実践した方法論の中世研究および文学研究全体における有効性と意義の検証という3つの点において成果を挙げた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

松田隆美 (MATSUDA, Takami), “ *Le Compost et kalendrier des bergiers*

(Paris, 1497) – A Preliminary Description ” 『藝文研究』第95号 (2008), 550-579 [査読無し]。

松田隆美 (MATSUDA, Takami), “ *Sir Gawain and the Green Knight and St Patrick’s Purgatory* ”, *English Studies* 88(2007), 497-505 [査読有り]。

松田隆美 「テキストからコンテキストへ - 中世英文学研究と現代」 *Studies in Medieval English Language and Literature* 21(2006.11), 21-28 [査読有り]。

〔学会発表〕(計2件)

松田隆美 「マグダラのマリアと mixed life 中世末イングランドの霊性」 日本英文学会第80回大会 シンポジウム「ヨーロッパ中世の神秘主義 霊性とナラティブ」。2008年5月24日。広島大学。

松田隆美 「中世文学研究とディシプリン」 日本英文学会関東支部 2007年4月例会 シンポジウム「英文学研究のディシプリンとは?」。2007年4月15日。東京大学駒場キャンパス。

〔図書〕(計3件)

松田隆美・原田範行・高橋勇 (編著) 『中世主義を超えて - イギリス中世の発明と受容』慶應義塾大学出版会、2009年3月。pp. xviii + 426 (「ヴィジョンからアレゴリーへ 死後世界の断片化と中世の終わり」 pp. 27-51 執筆)。

高宮利行、松田隆美編『中世イギリス  
文学入門 研究と文献案内』雄松堂出  
版、2008年12月。pp. 454(pp. 11-28,  
77-88, 95-101, 175-179, 187-191,  
261-266, 309-316, 365-366, 395-398)。

佐々木孝浩、住吉朋彦、松田隆美『義  
塾図書館を読む - 和・漢・洋の貴重書  
から - 』慶應義塾図書館、2007年1月。  
pp. 206 (pp.93-205執筆)。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

松田 隆美(MATSUDA TAKAMI)  
慶應義塾大学・文学部・教授  
研究者番号：50190476

### (2) 研究分担者

無し

### (3) 連携研究者

無し